

《聖隷雙葉女学園》シリーズ

■体験版■

親友の彼女が
キスしたいならいいよ、
と言った。

なつめ
夏目

なつめ
棗

□□注意事項□□

普通にこのPDFファイルを開くとウィンドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思います。文章を読むには問題ありませんが、CGを鑑賞する場合は多少拡大（100～125%くらい推奨）して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

□□登場人物□□

● 僕 Ⅱ 情けないが未だ彼女ができた事が無い。当然、エッチも未経験だ。

● 葛尾 朋代（くずお ともよ） Ⅱ 聖隷雙葉（せいれいふたば）女学園 二回生。身長…
142cm、体重…43kg、スリーサイズ…85（Cカップ）・52・83。純情そう
な美少女で外見どおりの良い子だが、エッチになると意外に積極的？。



● 相馬 剛史（そうまたけし） Ⅱ 僕の親友。根は良いヤツなのだが、女の子に関してはだらしがないとか、いつも連れてくる相手が違う気がする。今日の相手も初めて見る娘（こ）だった。

その日、折角良く晴れた日曜日だというのに出掛ける当てのなかった僕はレンタル店で借りてきたDVDを観ていた。

そこへ、いきなり玄関の扉が開いて親友の相馬 剛史(そうまたけし)が飛び込んできた。僕の部屋は 所謂(いわゆる)ワンルームマンションなので、玄関、即、私室(プライベートルーム)なのだが、独り暮らしの下宿なので鍵など掛けた事は殆んどない。僕は映画と一緒に借りてきていたアダルトDVDを夜に廻しておいて良かったと思わず胸を撫で下ろしたのだが、同時に剛史の様子に厭な予感もしたのだった。

剛史は部屋に上がり込むなり両手を合わせて最敬礼をしていた。

彼とは小学校からの腐れ縁で、まあ所謂『ちよいワル少年』とでも言うか、子供の頃は近所の餓鬼大将だった。小学校の頃は彼の妹や近所の女の子を相手に『お医者さんゴッコ』に付き合わされて、(まあ、何と言うか、それなりに)僕も良い思いもさせて貰ったが、その頃から彼は女の子に節操がなかったように思う。最近では、会うたび相手の娘(こ)が違っていて呆れるばかりだ。しかも、どの娘(こ)も美少女ばかりで、些か羨ましい限りだった。

しかし問題は、彼が両手を合わせて最敬礼するのは『部屋を貸してくれ』という合図だという事なのだった。

今の青芯学院(せいしんがくいん)三回生に進級した頃、僕の父が九州へ転勤になったのだが、営業所長としての栄転だった為こちらの家を売り払って家族で引越す事になった。しかし、僕は後一年なのでこのワンルームマンションを借りて貰って卒業までを独り暮らしする事になったのだった。

それからというものの剛史は、ちよくちよく、『部屋を貸してくれ』と言ってくるようになった。『部屋』というよりも、有体に言えば『ベッドを貸してくれ』という事に他ならない。彼の自宅は洋品小物を扱う店舗件住宅で、つまり四六時中両親が居るという事だ。だから、相手の娘(この家が無理な場合と、ラブホ代が工面できない場合は(たまに年上の彼女に払わせて利用していると聞かされたが)、僕の部屋に転がり込んでくる、という按配だった。

「またかい？」

少し厭味の籠った声で答える僕に剛史は悪びれもせずに答えた。

「いやな、その公園でイチヤイチャしてたら、お互いその気になっちゃってさあ…
…彼女の家は無理だし、ラブホ行きたくてもあいつ制服で来てるしよお……」

私服でもラブホ代なんて無い癖に……と、喉まで出掛かった言葉を僕は飲み込んだ。どのみち部屋を（いや、ベッドを）貸してやる羽目になるのだし、厭味を言っても始まらない。それに、彼は部屋を借りた翌日には、必ずアダルトDVDやらエロ同人誌やらを持って来るのだった。しかも所謂『無修正』というヤツだ。何処で手に入れるんだこんなモン……と思うが、ありがたく頂戴してしまう自分が少し情けない。

『やっぱ、生身の女はイイぜえっ！……お前もさあ、早いトコ彼女作ってヤラして貰えよおっ！』そう事あるごとに剛史は言って、昨日の彼女のナニはこうであの時の顔はどうだと自慢するが、そりゃあ僕だって彼女ができたらしたいさ、勿論。

「それじゃあ、いつもみたいに二時間くらいゲーセンでも行ってるよ……」

「悪（わり）いなあ……お前もさあ、早いトコ、彼女作って……」

いつもの聞き飽きた台詞を言い掛けた剛史が、ふと、何か思いついたように小首を傾げて続けた。

「そうだ、お前も一緒にスルか？」

「んっ!? ……な、なに、言って……」

「おお、そうしよぜっ！……今日のコレは俺の言うことにや逆らわねーしい……」

剛史は小指を立てて、にまつ、と笑って続けた。

「俺もさあ……女二人との３Ｐはしたコトあるけどよ、流石に男二人の３Ｐは初体験だぜえ！……お前となら、俺はいいぜえっ！」

「ば、ば、莫迦な事……い、言わないでよっ!?!」

「なんでよ？……挿(い)れるトコ判んなきゃ、俺が教えてやんよお！……ほれ、ガキん時によ……晃子(あきこ)のマンコ広げて一緒に見たじゃねえかつ！……あれと同じコトじゃんかよっ？」

晃子というのは剛史の妹で子供の頃の『お医者さんゴッコ』の一番の被害者だった。今でも彼女は僕と顔を合わせると真っ赤になって視線を逸らす、それは僕も同じ事だった。

「だ、だから……あ、あの頃とはもう違うんだからっ！」

「おおよ、ぜくんぜん、違(ちが)えよっ！……そりゃあ、もう……ぐっちゃん、ぐっちゃん、びらん、びらん、でよお？」

「……………っ！」

僕が剛史の卑猥な言い廻しに言葉を返せずにいると、それを了解の合図と思ったのか剛史はスマホを取りだして短縮ダイヤルをコールした。

「いま呼ぶから、待ってなっ！……………おお、俺だ……オッケーだから入って来い

よっ……それとな、お前に頼みがあってよ……」

「い、いい、いや……ぼ、僕は……い、いいから……そ、それじゃあ、二時間くらい時間を潰してくるから……」

僕は慌てて剛史の言葉を遮って扉に向かった。

「なんだよお、童貞卒業するチャンスじゃなかよーっ!」

剛史の言葉に後ろ髪を引かれる思いがなかったかと言えば嘘になるが、しかし、僕は躊躇(ためらい)を飲み込んで扉を開けた。そして、飛び出そうとして危うくつものめる処だった。開けた扉の前にスマホを耳に当てた美少女が立っていたからだった。

「ひい!」

思わず悲鳴を押し殺して見返してくる美少女に、僕は不覚にも見蕩れてしまった。

(うわあっ!!……『聖隷雙葉(せいらいふたば)の制服だよっ♪)

そのチャコールグレーの襟と同色のプリーツスカートに真っ赤なスカーフが印象的な『聖隷雙葉女学園』のセーラー服は、この街の男子高校生の憧れを中心だった。生粋のお嬢さま学園との評判も高い六年制のミッションスクールで、父兄にのみ配られるという学園祭の入場チケットはヤミで高額で売買されるとの噂すらあった。

(でも、この娘(こ)随分と小柄だけど……まさか下のカテゴリーって事は……な、な

いよな？)

つい、良からぬ妄想を抱いて見詰めてしまった僕に、彼女は微かに頬を染めて言葉を紡いだ。

「ご、ごきげんよう……ほ、本日は剛(たけ)ちゃん……い、いえ……剛史くんが……その……ば、莫迦なお願いをしまして、本当に申し訳ありませんっ!」

『剛史くん』と呼ぶからには同学年だと思い直した僕に、彼女は深々と頭を下げてから、何気に視線を逸らせて続けた。

「す、すす、すぐに終わらせますから……ほ、本当にご免なさいっ!」

そう言ってから、自分の口にした言葉の本来意味する処に気づいたのだろうか彼女の頬が、ぼつ、と朱に染まった。

「朋代(ともよ)さあ……ナニ、あほなコト言ってるんだ? ……それはナニか? ……俺が早漏(はやい)っていう意味か?」

その時、部屋の中から剛史が冗談半分に怒ったように言って、また彼女が焦ったように視線を泳がせた。

「え? ……あつ、ああつ……ち、違くて……そ、その……」

「それより、ベッドを借りるお礼にオッパイぐらい揉ませてやれよ?」

「ひい!?!……………」

一瞬、びくん、と固まってしまった彼女は次いで、おろおろ、と剛史と僕の間で視線をさ迷わせた。それから美少女は覚悟を決めたように、ぎゅつ、と両眼を瞑ると両手を後ろに廻してセーラー服の胸を突きだしてみせたのだった。



「ど、どどど、どうぞ…………ご、ご存分に…………お、お揉みくださいっ!」

「いや、存分につて程、立派じゃねーけどなっ!」

部屋の奥から聞こえてきた剛史の揶揄(やゆ)に満ちた言葉に、きつ、と瞳を開いた彼女は声の主を睨みつけた。

「もう剛(たけ)ちゃんには揉ませてあげないからっ！」

それから僕に向き直って、恥ずかしそうに言ったのだった。

「あ、あの……お、お粗末ではございますが……ど、どうぞ……ご、ご存分にっ！」
そしてまた瞳を閉じると、セーラー服の胸元を突きだすのだった。



「い、いいい、いいえっ!!……お、お気遣いなくう!……ぼ、僕……に、二時間ぐらい出掛ける用事があったので……ご、ごゆっくりい!!」

そう早口で捲くし立てて僕は振り返らずにマンションの廊下を走りだしたのだった。

(くううっ!……あ、あんな可愛い しかも『聖隷雙葉』の娘(こ)が……こ、これか

ら剛史と……え、エッチするんだっ!? ……ううう、やっぱり……お、お願いすれば……よ、よよよ、良かった……かなあ……はふう………)

マンションの階段を駆け降りて表に出てから自分の部屋を見あげた僕は、心の中に浮かんたふしだらな想いを振り払うように、ぷる、ぷる、と頭を振ってゲーセンへと向かったのだった。

*

それから、二時間と言ったが念の為もう一時間ゲーセンで時間を潰して僕は自宅に帰ってきたのだった。

部屋の扉には鍵が掛かっていたが（スペアキーは以前、剛史に渡してあった……と言うより奪い取られていたのだが）僕は自分の鍵で扉を開けて中に入った。

途端に、つーん、と独特の異臭が鼻を突いて僕は顔を顰（しか）めた。

（換気ぐらいておけよーっ！）

いつもなら、そういう事には抜かりなく、ベッドも綺麗にメイクし直して帰る剛史だったが（と言うより、相手の彼女たちが綺麗に片づけるのだろうが）、今日はどう

したのでらうと、あの『聖隷雙葉』の美少女の真面目そうな顔が浮かんだ。

(あの娘(こ)なら、人一倍そういう事には気を遣いそうだったのになあ……)

幾分残念な思いに駆られた僕だったが、しかし、その疑問はすぐに氷解した。

(……ってえ!?……まだ、二人ともベッドで寝てるんですがあつ!?)

手前側にこちらを向いて件の美少女が毛布に包まるように、奥側に剛史が素っ裸のまま仰向けになって眠っていた。その股間には項垂れた《ペニス》にコンドームが被されたままで、慌てて僕は視線を逸らした。

(き、汚いモン見せるなっつ!)

口直し——いや視線直しに美少女を見ると満足そうな笑みを浮かべ、軽く寝息まで立てていた。思わず床に膝を着いて僕は彼女の整った顔を、まじまじ、と覗き込んでいた。

広い額に掛かる栗色の前髪が滲んだ汗に貼りついていて。その下には伏せた瞼を縁取るように長い睫毛が生え揃い、すーっ、と通った鼻筋の下には小さな桜色の唇が微かに綻んでいて、呼吸に合わせて甘い匂いの呼気が洩れてくる。

(こ、この唇で……た、剛史と……き、キスしたり……あ、ああ、あれを……く、啜えたり……いい、いい、いいやつ!……この娘(こ)……ええと……朋代さんだったかな……

彼女に限って……ふえ、フェラチオなんて……し、しないよな？……う、うん……しない、絶対しないっ！

僕は勝手にこの美少女を美化していた。生まれてから未だ彼女居ない歴を更新中の僕には、この『聖隷雙葉』の美少女が『あんなもの』を口にする処など想像もできなかったのだ——いや、違う。想像しなくなかった、のだ。

(き、キス……したい……な……)

彼女の桜色の唇から呼吸が洩れるたび、僕の股間がズボンを押しあげてゆく。

(き、キス……くらい……いい、いい……いいかな？……ね、眠ってるし……そ、そつと、触れる……くらい……なら……)

僕の中で湧きあがった邪まな情念が理性を蹴散らそうと足掻いていた。

(こ、ここは僕の部屋なんだし……ね、眠っている……と、朋代さんが……わ、悪いんだから……)

彼女の名前を心に刻んだ瞬間、僕の理性は敗北を喫した。

僕は、そつ、と顔を近づけた。

(……き、キスする時って……か、顔を斜めに……あ、合わせる……んだよ……ね？)

勿論、彼女などできた事もない僕は当然キスの経験などなかったし、映画で観たキ

スシーンを思い浮かべてそう考えてみた。アダルトDVDのような濃厚なキスは荷が重いというか、遣り方も判らなかった。

（そういえば『お医者さんゴッコ』の時も晃子ちゃんはキスだけは厭がつてさせてくれなかったなあ……）

ままよ、と僕は顔を傾げて彼女の唇に近づけた。

（そ、そうかつ!? ……こ、これって……ぼ、僕のファーストキス……）

そう思った瞬間、僕の心臓が早鐘のように鳴り響き、鼓膜の奥を打ちつける。僕の喉が、ぐびり、と鳴った。

「う、うん……」

その時、彼女が微かに身じろいで、その唇から洩れた吐息が僕の突きだした唇をそよがせた。

ゆつくりと長い睫毛があがつてゆくのを僕は身じろぎもできずに見詰めていた。

「……ん？ ……剛（たけ）……ちゃん？」

彼女の両目が焦点を求めて寄ってゆき、その唇が悲鳴の形に開かれそうになった時、慌てて僕は彼女の唇を両手で塞いでいた。

「あ、ああ、あの……ぼ、僕ですっ! ……ま、まだ居るなんて思わなくて……こ、声

あげないで……く、くださいっ！」

僕の声を認識した彼女の瞳が安堵に緩んで、了解の返事の代わりにゆっくりと一度、瞬きをした。

恐る恐る僕は両手を外して、彼女に詫びた。

「お、驚かすつもりじゃなかったんですが……あんまり寝顔が可愛くて……」
その言葉に彼女が擦ったそうに笑った。

「わたししたら、気持ち好くて眠っちゃったんだ………つて、剛（たけ）ちゃん
はっ？」

慌てて振り返って、素っ裸で爆睡中の剛史の姿に吹きだした。

「やだ、もうっ！………なんて格好で眠ってるのよう！………鼾（いびき）まで、掻いて
るしい……」

そこまで言って気がついたように、彼女は慌てて身体に巻いた毛布を引っ張りあげた。多分、その下は剛史と同じように素っ裸なのだろう。

「あ、あの……み、見てませんからっ！」

慌てて言い募る僕の言葉はスルーして彼女が口を開いた。

「もしかしてえ………キス泥棒さん……かな？」

語尾を悪戯っぽく跳ねあげて『聖隷雙葉』の美少女が僕を見返していた。

「んなっ!？」

正しくその通りだったので僕は返事に窮した。

そんな途惑い焦る僕に美少女は匂うやかな笑みを湛えて言葉を紡いだのだった。

「キスしたいなら……いいよ？」

「へ？」

彼女の言葉の意味を僕の脳が理解するのを拒むように、僕は間の抜けた声を洩らしていた。

「だ、だつて……ほ、ほら……さつきさ……さ、触らなかつたでしょ?…お、おお、おっぱい……だ、だから、まだ……お礼していない……から……」

恥ずかしそうに言い募って、彼女はもう一度、同じ言葉を紡ぎだした。

「キスしたいなら……いいよ♪」

先程より、かなり甘やかな響きが籠っていた。

そして、彼女の両の頬がゆつくりと落ちて、心持ち上向けた小さな桜色の唇が突きだされた。

僕にはもうその唇しか見えなかった。頭の中が真っ白になって僕は両目を閉じると

顔を寄せた。顔の角度がどうの……など、既に何処かへすっ飛んでいた。

彼女の鼻に僕の鼻の先がぶつかった。それでも構わず僕は唇を押しつけた。
柔らかだった。

少し濡れて綻んでいるのが判った。

(女の子の唇って、こんなにイイんだあ♪)

僕のズボンの前が痛いくらい突っ張っていた。

(で、でも……も、もう終わりにしないと……)

僕がそう思った時、彼女の両腕が僕の首に巻きついて引き寄せられた。

舌が、彼女の舌が僕の唇を割って侵入してきた。

「ふいぐう!?!……はぶっ……うぶぶっ……」

僕の途惑いなどお構いなしに彼女の少しざらついた舌先が僕の口腔を蹂躪する。

「…んむっ…(ぺちよ、ちゅろ、ちゅぷっ)…ん…んんう…(ちゅぷ、にちゅ、ちゅ
ぽっ)…んん…(びちゅ、れろう、えろう)……」

上顎の裏側をなぞり、頬の内側をこそぎ、齒列をなぞっては、卑猥な水音を立てて
唾液を絡ませる。

「…(じゅろ、ぢゅぷっ)…んん…(ちゅく、えろっ、れろう)…んん…んう…(ぺ

ちゅ、ちゅぷつ、にゅちゅ）…んっ…うく…（ちゅぽ、ちゅる、えろうつ）…んん…
んふう…（ちゅぽつ、ぢゅるるう、じゅるるるうつ）…んくん、こきゅっ…ぷあ…
はあ…はふう…

最後に絡まり混ざり合った唾液を一頻り啜りあげて、それを嚥下した彼女の喉が可愛い音を響かせて、漸く僕の唇は解放されたのだった。

「うふっ ♪ ……名前も知らない相手とキスしちゃうなんて、わたしって不良だ…
何だか興奮しちゃう…ねっ？」

頬を桜色に上気させて彼女が微笑んだ。

「ええと、僕は…」

しかし、名乗ろうとした僕の唇に、慌てて指先を押し当てた彼女が言った。

「ああ、言わないのう！ ……だって、あなたとわたしは…唇だけの、か・ん・け・
いっ…うふっ ♪ ……差し詰め、『リップ彼女』……よねっ ♡」

目尻に艶かしい色香を滲ませて『聖隷雙葉』の美少女はそう囁（うそぶ）いたのだった。後になって僕は彼女が『キス魔』なのを知る処となるのだが、この時は『超』のつく美少女相手のファーストキスに逆上（のぼ）せあがっていたのだった。

そして、あろう事か彼女は、ベッドから身を乗りだして押し掛かるよう僕を床に押

し倒すと、身体の上に乗ってきたのだった。

「重くは、なあい？」

「あつ、全然平気ですっ！」

毛布一枚だけを身に纏った柔らかな重みに僕は、くらくら、としてしまった。

彼女は、その柔らかな凹凸を押つけたまま、また僕の首に両腕を絡ませると僕の眼を覗き込むようにして訊いた。

「うふふっ ♪……さつきさあ、スマホで『童貞』とか聞こえちゃったんだけど……
…ねえ、キスしたの初めて、なんてコト……あはっ、ないよね？」

僕は思わず視線を泳がせてしまった。そんな僕を、彼女が探るように見詰めて途惑いを滲ませた。

「ええっ？ ……嘘う!? ……あなたのファーストキス…奪っちゃったのう? ……ど、
どうしようっ ……わたしなんかが……」

「い、いえ……き、君みたいな可愛い娘（こ）とできて……う、嬉しいです……」

僕が偽らざる本音を吐露すると、彼女は擦ったそうに僕の上で身を振った。毛布越しにも柔らかな双つの乳房の感触が判って、僕の《逸物》がズボンの中で大きく伸びあがった。勿論、それは身体を重ねている彼女にも如実に伝わっている筈だった。

「ね？……わたしのキスで感じちゃった？」

揶揄（からか）うように彼女が訊いた。答えに惑う僕に、彼女は更に言った。

「お腹の下でえ、さつきからずくつと硬くなってるんですけどう？」

「ご、ご免なさい……」

僕はそう答えるしかなかった。親友の彼女に欲情するなんて最低だった。いや、それより親友の彼女の唇を奪ってしまったのだ。彼女が『いいよ』と言ったのは確かだけれど、そもそもは、眠っている彼女に『キス泥棒』を働こうとしたのは僕なのだ。

しかし、そんな僕の裡なる葛藤を洗い流すように、彼女は実に呆氣らかんと言ったのだった。

「えへへえ ♡ ……それじゃあ、もつと、えつちいキスも……するう？」

「え？……ええ？」

途惑った顔で見あげる僕に彼女が笑い掛けた。

「おべロをだしてみても……」

「あ、あの……」

尚も困ったように見あげる僕に彼女が、えろくつ、と可愛い薄桃色の舌先を突きだして見せた。

「ほあ、ほうひふうひい『ほら、うううふうにい』……」

促されるまま僕が同じように舌先を突きだすと、すぐさま彼女の唇が僕の舌を絡め取り口腔に誘い込んだ。

「…はふうっ…（じゅぶう、じゅろろっ、ぢゅぶっ）…んんう…（ぢゅぶぶう、ぢゅぶるう、じゅるるんっ）…んん…んぐっ…（じゅぶるっ、じゅぢぢゅうう）……」

彼女の唇が僕の舌を扱き吸い立てる。

「……ぶあっ……ろう？……おべろふえらは？」

一旦、僕の舌を解放した彼女が口端に溢れた唾液を舐め取りながら訊いた。

「しゅ…すごい…えほっ……れすっ…」

僕が口腔に溜まった唾液に咽るように答えると彼女が、にまつ、と笑った。

「それじゃあ、さあ？……わたしのお涎も…ごつくん、するう？」

「はっ!?……は、はいっ……ご、ご馳走になりますっ！」

思わず間の抜けた返事を返す僕に彼女が照れ笑った。

「もう！……ば、莫迦っ♪」

そして、彼女はまた唇を合わせると、ぺちや、くちゅ、と舌を絡ませながら暫く口腔を弄ってから、えろろろろ……っ唾液を流し込んできた。

僕も彼女の舌を吸いながら流し込まれた唾液を口腔で攪拌（かくはん）してから嚥下すると、ごきゅんっ、と大きな音がした。

「どおう？」

唇を離れた彼女が少し心配そうに問い掛けた。

「た、大変結構な……お、お味でした！」

そう答えたものの、本当の処は未だ頭も身体も加熱状態で、僕は何がナニやらだったのだが。

それでも彼女はその返事に満足したのか、僕の下唇を舌先で弄（いら）いながら訊いたのだった。

「ねえ……おちんちん、苦しそうねっ？」

「ひえっ!？」

まさかお嬢さま学園として名高い『聖隷雙葉』の美少女の口からそんな言葉が洩れるとは想像だにできなかった僕は、呆氣に取られて彼女を見あげた。僕のその沈黙を彼女は違う意味に取ったのか、更にこう訊き直した。

「ん？……おちんぽ……の方が……いいの？ ……それとも、おちんこ？」

「い、いえ……ど、どちらかと言うと……さ、最初の方が……」

僕の返答に彼女は《そこ》の上で腰を拗(くね)らせ押しつけて悪戯(いたづ)っぽく訊いた。

「うん？ ……な・ん・て……言(い)って欲しいのかなあ？」

「ええと……だ、だから……その………お、おちんちん……がいいです……」

「うふふ ♡ ……ここのうの《言葉責め》って言うの？ ……いつも、わたしの方が剛(たけ)ちゃんに《言(い)わされる側》なんだけれど……《責める側》も……くふっ……何(なん)だか興奮(こうふん)しちゃう ♡」

『聖隷雙葉』の美少女が擦(こ)ったそうにまたも股間(こかん)を拗(くね)らせた。

「あ、あう ♫」

齋(さい)(もたら)された刺激(しき)にズボンの中(うち)の《ぼく》が悲鳴(ひめい)をあげ、彼女(かのじょ)が更にトンでもない事(こと)を言(い)った。

「うふふ ♫ ……お口(くち)でしてあげようか？」

「ひええ!?! ……だ、だだ、だって……き、君(きみ)は剛史(さとし)くんのか、彼女(かのじょ)な……わ、わわ、訳(わけ)だしい……」

「平気(へいせい)だよう……お口(くち)でするだけだモン ♫ ……ほらあ、わたしは『リップ彼女(かのじょ)』だしい……それに……さつきさ……剛(たけ)ちゃんだっておっぱい揉(も)ませろって言(い)ったくらいだモンっ！」

呆気らかんとそう言い放つ彼女に僕は眼を白黒させて見あげるばかりだった。

「それとも、おっぱい揉む方が……いい？」

「い、いえ……ど、ど、どちらかと言えば……その……く、口で……」

「ふうん？ ……おっぱい揉み揉みよりも……わたしにおふえらを、さ・せ・た・い……のねえ？」

いや、『お口でしてあげようか？』と言ったのは君の方じゃないか、と言いたいのを、ぐつ、と堪えて僕は彼女の唇を見遣った。僕の人生で出会った中でも飛び切りの美少女が、その桜色の小さな唇を微かに綻ばせて誘っているように見えた。

いや——、

いや、違う——。

この唇は、僕の為に充（あ）てがわれた唇ではない。僕の視線が泳いで、視界の端にベッドで未だ爆睡中の親友の寝姿が掠めた。

しかし、僕は躊躇（ためら）いながらもこう訊かずにはいらなかった。

「ほ、ほ、本当に……い、いいの？」

微かに声が裏返った自分が情けない。

けれど彼女は何の惑いも見せずに答えた。

「いいよっ ♪」

だから僕は声を上擦らせて言っていた。

「お、おお、お願いしますっ！」

「はっいっ ♡」

それに対して彼女はにこやかに答えて身体を下へと移動し始めた。

「おひょうっ ♪」

毛布越しでも柔らかな双つの膨らみが移動してゆく感触が伝わってきて僕は堪らず声を洩らす。

そして、彼女の身体が僕の下半身に向かって降りてゆくに連れて、身体に巻いていた毛布が開(はだ)けたのか《その感触》はリアルを増していった。

更に、ちようどズボンの盛りあがった《ところ》を挟む位置で一旦身体の南下を止めた彼女が、これ見よがしに双つの膨らみを押しつけて僕を見あげた。

「わたしね、剛(たけ)ちゃんから、おふえらは……いっっぱい、仕込まれたから……ちよっぴり、自信あり……なんて、ね？ ……あはっ ♪」

(そ、そんな……改めて剛史の彼女だっと思ひ出させるような事を……い、言わないで欲しいなあ……)

それでも僕はその背徳感を必死に押さえ込んで言った。

「そ、そ、それは……た、愉しみ……だなあ……あ、あはは……」

僕の上擦った返事に気を良くしたのか彼女は手指を《盛りあがり》に宛がってズボンの上から、こす、こす、と擦った。

そうやって暫く上目遣いで僕の反応を愉しんでから、彼女の指先がズボンのボタンを外して、チャックを、デジジジジジジ——つ、と降ろした時だった。

「う、うん……」

ベッドから剛史の唸り声が聞こえたのだった。

「「ひいっ!?!」」

二人の喉が異口同音の悲鳴を洩らし、眼と眼が合った。

暫く固まってしまった僕たちだったが、僅かに早く呪縛から抜けだした彼女が、上半身を、そつ、と持ちあげるようにしてベッドを窺った。

身体に巻きつけていた毛布の前が完全に開（はだ）けていて、真っ白い裸身に思わず僕の視線が釘付けになった。

『お粗末』だと彼女は言ったが、どうして、柔らかそうな双つの乳房は綺麗な釣鐘型を見せて盛りあがり、その先端の桜色の乳首は、つんつ、と尖って見えた。そこか

ら下って、きゅつ、と括れたウエストには可愛い縦割れの臍の窪みが佇み、更に下れば引き締まった下腹部には栗色の薄めの下草が微かな湿り気を帯びて、くしゃつ、と丸まっていた。

「大丈夫みたい……………って……………きゃあ…あああつ！」



振り返った彼女が僕の視線に気づき、込みあげた悲鳴を両手で押さえ込んだ。

そして、大慌てで毛布の前を合わせた彼女は、（えっちい！）と唇だけ動かして僕の上から降りると部屋の中を、きよろ、きよろ、と見廻した。すぐに彼女はベラン

ダがあるのに気づいて僕に顎を杓つて小声で囁いた。

「剛(たけ)ちゃんが起きると拙いからベランダに出ていてっ!」

(そ、そんなあ~~~~っ!?)

あまりに呆気なく未遂のまま僕の《フェラチオ初体験》は『ジ・エンド』を迎えたのだった。僕はマンガみたいに、がっくり、と項垂れて摺り落ちそうなズボンを押さえてベランダへと退避させられたのだった。

それでも、半分開かれたままだったカーテン越しに部屋の中を覗くと、彼女が素っ裸のままブラジャーを着けている処だった。

思わず僕の視線は釘付けになっていた。向こう向きなのが残念だが、ぷりっ、としたヒップの眺めも悪くはない。

(ブラって、ああやって寄せてから着けるんだっ!)

何事も勉強だし……と、僕は心の中で正当化して『覗き』を続けた。

ブラジャーを着け終えた彼女はベッドの下方に向かい、脱いであったセーラー服を拾いあげた。幸いな事に(?) 今度はこちら向きに立ったままセーラー服を頭上にあげて腕から頭と通してゆく。何故かショーツを穿いていないブラジャー一枚の真っ白い裸身が眼の前にあった。当然のように剥きだしの下腹部に眼が奪われる。

——と何故か、びくつ、と彼女の身体が震えた。
思わず視線をあげるとセーラー服から顔をだした彼女が僕を睨んでいた。
「ひいっ!?!」



『キス泥棒』の次は『覗き』の現場を押さえられた僕が竦みあがる前で、眉間にシ
ワを寄せた彼女は、シャ——つ、とカーテンを引いてしまった。
恥ずかしいやら情けないやら、僕は未だ治まらぬ《息子》を宥めてズボンのチャッ
クをあげるしかなかった。

待つ事数分、またカーテンが三分の一程開けられて彼女がベランダに出てきた。勿論、きっちり、身繕いを整えてである。

「えへへえ……お・ま・た・せつ♪」

先程の『覗き』の罰を覚悟した僕に、彼女はにこやかに微笑み掛けた。

しかし、ベランダの正面の景色を台無しにする隣の倉庫の壁に呆れた声をあげた。

「な、なに……これえ？」

そうなのだ。僕の部屋を訪れた者が必ず呆れ返る、それは、正しく『壁』なのだった。ベランダの手摺りギリギリに建てられたその倉庫は、僕の部屋からの唯一の視界を完全に奪っていた。まあ、だからとても安い物件（へや）だったのだが。

しかし、彼女は呆気らかんと言った。

「くふふっ♪……でもう、逆にさお部屋でナニしていても、覗かれる心配はなくて安心ねっ！……うふふっ♪……そっかあ、それで剛（たけ）ちゃんが、ここなら大丈夫って言ったんだあ♪」

「いや、多分そういう意味ではないと……」

異を唱えようとした僕に彼女が、くすつ、と笑って言った。

「わたし、今ねえ……くふっ……おばんつがあ、剛（たけ）ちゃんのお尻の下にあつてえ…

…てへっ…取れなかったからぁ……のーぱん、でっすっ♪」
にこやかに告白した彼女が短いプリーツスカートを翻して見せた。
淡い栗色の下草がチラ見えて、僕の視線は吸い寄せられるようにソコにホールドしてしまった。



それに気づいた彼女がジト目で訊いた。

「もっかい、見たい……のう？」

情けなくも、くび、くび、と頷く僕に彼女がきっぱりと拒否った。

「いや、ですっ！」

戯(おど)けて、がつくし、とポーズをとる僕に、彼女は朗らかにウインクして言ったのだった。

「だってえ、わたしがあなたのおちんちんを、見るんだモンっ♪」



「ほへえ!？」

「なによ……お口でして欲しいんでしょう? ……くふふっ♪ ……ここなら安心だし……ほらあ、見せて、みせてっ♪」

言うが早いのか、彼女は僕の前に跪いてズボンのボタンを外した。そして、あろう事

か顔を寄せるとチャックのフックを口に咥えて、ヂジジジジジ——つ、と降ろしたのだった。

「うわっ!!……わわ、はあっ!!……え、エロいっ!!」

一度は消えたと思った《フェラチオ初体験》への期待に《まじエロ仕草》が二乗されて、僕の《逸物》は早くもマックスを記録していた。

「むふんっ♪」

自慢げに鼻を鳴らした彼女が唇を離すとズボンがベランダの床に落ちていった。

「これもう……剛(たけ)ちゃん仕込みでくすっ♡」

(ま、また、そういう 剛史の彼女だつて思い出させる事をつ!……この娘(こ)にはフェラチオなんて《寝取られ(うわき)》の範疇には入らないのだろうか?)

しかし、そんな僕の当惑など何処吹く風で、彼女はブリーフの前に掛かるシャツの裾を捲りあげると、僕に持つように眼で合図した。

「何か、凄くないい?……おばんつから、お顔が覗きそうなんですけどどう?」

彼女の微妙な表現に照れる僕に構わずマイペースの彼女が言った。

「……うん、絶対、剛(たけ)ちゃんよりおつきいよう♪」

そして、顔を横向きに傾げると、はむんっ、とブリーフの上から《逸物》の根元辺

りを横啜えにしたのだった。

「おほああつ!？」

ブリーフ越しでも初めて感じる唇の柔らかさに僕の腰が、ぷるつ、と動いた。それを愉しむように上目遣いで僕の視線を捕らえたまま彼女の唇が、はむ、はむん、と圧縮しながら《雁首》目差して登ってくる。更に舌先がちょうど《裏筋》をなぞるように押しつけられ、唾液を塗すように擦りあげられて、気持ち好いったらなかった。

「おほう♪……おうっ……おおうっ!？」

僕はまだ直に触れられていないにも関わらず腰を震わせて声を上擦らせた。

そして、とうとう《雁首》まで辿り着いた彼女の舌先が括れの裏側をなぞり、次いで顔を起こした彼女の舌先がブリーフの上から《鈴口》を穿(ほじ)った。

「うひゃあああつ!？」

僕の喉が情けない声を洩らし、彼女が唇を離して《そこ》の状態を指摘した。

「もう、お汁(つゆ)が、滲んでいるよう？」

「ううっ!」

情けないやら、恥ずかしいやら、頬を染めて見降ろす僕に、にんまり、とほくそ笑んだ彼女はもう一度ブリーフの上端を口に啜えて、ずろり、と摺り降ろしてしまった

のだった。

ブリーフの圧縮から解放された僕の《逸物》は、しかし、重力の法則に逆らって下腹に貼りついたままだった。

「うわああっ!?……お、おっきい♥」

ブリーフを膝下まで摺り降ろして《僕》の全容を舐めるような視線で確認し終えた彼女の瞳が、皿のように見開かれて驚きの色を浮かべていた。

それから、うつとり、と目尻に艶を滲ませた彼女は言ったのだった。

「当社比……三〇%増し?」

「な、ななな、なに?……当社比って?」

この場にそぐわない言い廻しに僕が首を捻ると、彼女は照れ臭そうに言った。

「あっ!……え、えへへえ……わたしの……ほ、ほら……あの……え、えつとう……け、経験人数中……の……さ……」

そう言葉にしてから、彼女は失言に気づいたように慌てて付け加えた。

「ああっ……で、でも、でもう……よ、四本目だよ……こ、これえ!」

しかしそれは、あまりフオローになつていなかった。何故なら、剛史と僕の間にも、後二人、啜えた相手が居る……という事に他ならなかったからだ。

奇妙な悔しさが僕の心に滲んだ。

そんな僕の表情の変化を感じ取ったのか、彼女が、ぽつり、と小声で呟いた。

「ごめんね……」

何に対して謝ったのかは判らないが、直ぐに元の明るい顔に戻って彼女は言った。

「それじゃあ、おふえら……するね♪」

「よ、宜しく願いますっ！」

「まっかせてっ♪」

明るく笑った彼女の細い指先が僕の《逸物》の根元に纏いつき手前に倒すと、差し伸べた舌先が今度は直に《鈴口》を舐めあげた。

「くうううっっ♪」

先程のブリーフ越しの感触に比べたら『当社比二〇〇%増し』の快感が背筋を駆け昇って僕は腰を、ぶる、ぶるっ、と慄(おのの)かせた。

そんな僕を嬉しそうに上目遣いで見あげながら、彼女の舌先が尚も僕の《鈴口》を穿(ほじ)り、先走りを掬い取って口腔に運んだ。そして、口腔で味わうように転がしてから僕に見せつけるように、うくん、と呑み込んで見せたのだ。

「むふんっ♪……美味しいっ♥」

僕は彼女のその表情だけでイッてしまうかと思った。

僕はもう、この朋代という名前の——天下のお嬢さま学園『聖隷雙葉』の——美少女（こあくま）に、完璧にノックアウトだった。

「まだ、イッたりしたら、駄目だよ？」

僕の《逸物》の先端が膨らんで、びくん、びくんつ、と震えているのを敏感に察知したのか、根元を握っていた彼女の指先が環を窄めて、ぎゅうつ、と圧縮した。そして、何事もなかったかのように彼女はフェラチオを開始したのだった。

——あむううんつ……ちゅぶつ、ちゅぱつ……くふつ、くちゅつ……ちゅぽつ、ちゅぷ……んんつ……ぢゅるつ、じゅぶう……ちゅぶぶつ、くぼつ……ぐぶつ、ちゅぶつ……ぐぶつ、くりゅつ……ん、うっ……きゅぽつ、くぶう、ふふう……

唾液を塗すように舌先が踊り、唇が扱きあげ、窄めた頬の内粘膜が擦り立てる。

——じゅるる、ちゅぶ、ちゅぶふつ……んふつ……ずずう、ずじゅつ……じゅるるう、じゅぶぶぶう……ちゅぶつ、じゅるるるつ……うくん、んぐつ……んぶぶつ、はぶぶ……ちゅぶぶつ、ぢゅぼつ……ぢゅぶるつ、ちゅぱつ……はふつ、あふう……

更に、窄めた唇で《幹》を圧縮しながら吸いあげられて僕の腰が浮きあがって悲鳴をあげる。彼女の口腔で唾液と混ざり合った先走りが卑猥な水音に変わる。彼女の鼻

から洩れた息継ぎの呼気が僕の陰毛をそよがせる。

——ぐじゅるっ、じゅぶう…ぢゆるるっ、ちゅぶぶぶう…ぐぢゆるるっ、ぢゅずずずう…ぢゆるるるっ、ちゅぶぶぶぶう……ぐぢゆるるるっ、ちゅぼっ…

またも強烈なスロートで吸い立てられて僕の腰が、びくんっ、びくっ、びつくんっ、と震えたっ。

「あうう……ああっ、あううっ!？」

僕の喉も悲鳴を洩らし、根元を絞めつけられた《逸物》のイキそうでイケないもどかしさで瞼の裏が真っ赤に燃える。

「お、おねっ…お願いいっ!?!…ゆ、ゆびい…ゆびっ、離してええええっ!!」

女の子のような情けない声で僕は彼女に解放(しゃせい)を訴える。

「くふふっ♪……もう、ちよつとう…我慢、がまん、だよう!？」

彼女の唇が悪魔の囁きを洩らして、また《僕》を咥え込んで吸い立てる。

——じゅぶう、ぐじゅるう…ぢゅぶぶぶっ、じゅるるるう…ぢゅずずう、じゅぶぶぶう…ぢゆるるるっ、ちゅぶぶぶっ…ぢゅろうっ、ちゅぼぼぼぼっ…

彼女の唇が《幹》を抜き立て、喉が《鈴口》を吸いあげ、その間も彼女の舌がまるで別の生き物のように蠢いて浮きでた血管を齧り尽くす。

「おひようううつ!!……はひいいいつつ!!」

もう限界だった。僕の眼から涙が零れ、腰が、かくん、かくんつ、と突きあがる。

「いいほ『いいよ』つ!!……わはふいほのほひ『わたしの喉に』、らひへえ『射精(だ)してえ』つ!!……らふいへえ『射精(だ)してえ』つ!!」

喉奥に咥え込んだままのくぐもった彼女の声が許諾を伝え、きつく圧縮されていた指先の絞めつけが緩んだ瞬間、僕は生涯最高の歓喜(しゃせい)を覚えたのだった。

「きへええええええつ!?!……で、で、射精(で)るうううううつ!!」

——どびゆるるるんつ! びるゆんつ、びゆるるるるるつ! びゅぶるつ、びゆるるるるうつ!! びゆるるるるんつ! びゆるるるるんつ、びゆるるるるんつ!!!

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。

本篇では、この後はほぼエッチシーンです。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。